

主 題：成熟した信仰者を目指して①**聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2－7節**

新しい一年を始めるに当たって、この朝皆さんと一緒に考えたいのは、Ⅰテモテ3：2－7から、タイトルにもあります成熟した信仰者を目指すということです。

内容に入る前に、質問があります。皆さんは今年の目標を立てられたでしょうか。こんな自分になっていきたい、そういった目標はあるでしょうか。新しい一年が始まると、あちこちで新しい自分を目指す声を耳にします。ネットを見ていけば、ジムやダイエットプランの広告がこの時期、特に大量に流れてきます。新年の抱負を呟いている人の投稿も目にします。実際、この数日だけでもあちこちで健康的になりたい、痩せたい、成長するために新しい特技や趣味を見つけたい、そういった声が溢れているのを見ました。多くの人が毎年この時期になると、心を新たに一年頑張っていこう、そうやって歩み始めるのです。ただ残念な知らせもあります。立てた目標の多くが最後まで続くことは余りありません。ある調査によると、ほとんどの人が目標を立てた2週間後には挫折してしまう傾向にあると言われていました。なぜ失敗に終わってしまうのでしょうか。その理由をある専門家はこんなふうに説明していました。新年の目標が失敗しがちなのは、目標が曖昧で、非現実的で、対象が広すぎるからだ。目指す目標が曖昧であれば曖昧であるほど、人は途中で目標を見失ってしまい、そして目標を見失えば、意欲を失い、そしてその結果、諦めたり、やめてしまうと言うのです。

○神様の描く成熟した者の姿：15個の霊的特徴

そしてこれは私たちの信仰の歩みにおいても同じだと言えます。改めて考えてみてください。私たちは今、例外なく信仰のレースを走っています。救われた者として、大きな感謝を持って、愛する主にいつかお会いする日を楽しみにしながら、主に似た者として変わっていくことを目指して一日一日を歩んでいます。でも時に私たちは、目指している姿があやふやになって、自分自身が思い描く勝手な姿で満足していることもあるかもしれません。私たちの信仰生活が停滞してしまう一番の理由は、実はどんな信仰者を目指しているのかが曖昧なまま歩いていることにあるのかもしれません。でもそんなふうに歩み続ける必要はありません。神様はすべての信仰者が目指していくべき模範というもの、目標というものを聖書を通してはっきりと教えてくれていました。だからこそ、新しい一年の最初、神様が描いている成熟した者の姿とはどんなものなのかについて、一緒に考えてみたいと思います。

今回見ようとしているⅠテモテ3章には、特に教会のリーダーである長老、牧師が備えているべき資質が挙げられています。ぱっと見ると、いや私、牧師を目指していないんですけど、自分と距離があるように感じる箇所かもしれません。でも覚えていてほしいのは、ここで挙げられている霊的特徴というのは、何か特別な人のためのものではありません。ここに書かれているものは、成長を目指して歩んでいる、走っているすべての信仰者が目標とするべき姿でした。15個の特徴を見ることができますけれども、きょうはその半分と一緒に見たいと思います。自分が勝手に思い描く姿ではありません。神様が描いている霊的な人物、成熟している人物とはいったいどんな姿なのか、みことばと自分を照らし合わせながら一緒に吟味してみましょう。そして七つ見ていく途中で、もういっぱいいっぱいになるかもしれません。それでもいいです。一つでも自分自身のこととして当てはめて、この新しい一年、新しくされた者として、ともに成熟を目指していきましょう。

Ⅰテモテ3：2－7

「：2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、：3 酒飲みでなく、

暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、：4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。：5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——：6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。：7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

1. 非難されるところがないこと 2 a 節

では、最初の特徴から見てみましょう。神様が描いている成熟した者の姿の一つ目は、非難されるところがないということです。2 節に「非難されるところがなく」と書いていました。さて、「非難されるところがない」というのはどういうことでしょうか。もちろんこれはこの人物がいったい何の罪も犯さない、完璧な存在ですということを表しているのではありません。言うまでもなく罪人である私たちはみな例外なくいろいろな過ちや失敗を犯してしまいます。自分には罪がいったいありませんと言える人はここにはだれもいません。いやむしろヨハネもかつてこんなふうに口にしていました。I ヨハネ 1：8 に「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」とあります。だれも罪がないなど言うことはできません。もし言うのだとしたら、それはただ自分を欺いているにすぎませんと。

では、「非難されるところがない」とはどういうことでしょうか。ポイントになるのは、このことばが持っている意味です。「非難されるところがない」ということばは、もともと二つのことばがくっついて一つになったものです。一つは、「～がない」という否定することば。そしてもう一つは「何かをつかむ」とか「何かをしっかりと捉える」ということば。これがくっついてできたのが、この「非難されるところがない」ということばでした。そこからこのことばは、つかむことや捉えることができないものを表しています。つまり非難されるところがない人物というのは、その歩みに関して、その生き方に関してだれかから何かをずっと責められたり、非難され続けるようなことがない人物のことを言いました。罪や失敗が全くないという話ではありません。どれだけ霊的に成熟した人でも罪を犯して、それを指摘されることもあります。でも、この人は罪を犯せばすぐに悔い改めて、指摘された間違いを正しながら、主の前を歩んで行こうとします。主を悲しませることをしてしまうけれども、主に喜ばれることを追い求めて、どんな罪であったとしても脱ぎ捨てながら歩んで行こうとします。いつもそうやって歩んでいるからこそ、この人はだれかから指をさされて、この部分に常に問題がありますよと、非難され続けることがないのです。つかみ続けられることがないのです。いつまでも同じ罪に問われることがない、批判的になり続けない、そんな誠実な人物。それがこの成熟した信仰者の一つの姿でした。

そしてもちろん模範となるべき教会のリーダーが、そのような特徴を持っていることは欠かせないことです。でもすべての信仰者にとっても、これは目指すべき姿として聖書の中で教えられていました。たとえば別の箇所でも、パウロがこんなふうに述べています。ピリピ 2：14－16 を見ると、「：14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。：15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、：16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。」と書いています。曲がっているこの世の中、邪悪な罪に汚れているこの世の中、その真っ暗やみの中で光として輝き続けようとするのであれば、非難されるところのない者として、純真な者でい続けることは、とても大切なことでした。神様を忌み嫌っている者たちの中にあって、主に変えられている私たちの生き方をまわりの者が見た時に、神様やみことばを積極的に攻撃する口実になってはいけないということです。

改めて自分のこととして、よく考えてみてください。もしきょうまわりの人が、私たちの歩みを見る時、そこに何を見るでしょう。罪を犯して、失敗をしながらでも日に日に変わられていく、日に日に神様の喜ばれることを求めていく、そのような非難されるところのない歩みでしょうか。それともいろいろ

な部分をいつまでもつかまれて、ここにも、ここにも問題がありますと、責められ続けるような歩みでしょうか。口では多くのことを語っているかもしれませんが。でも実際の生き方がそれにいつまでも見合っていない、批判の的になり続けるような歩みでしょうか。私たちはみな例外なく何度も罪を犯してしまう弱い者です。でも、私たちはみな、罪を犯しても、そのたびに罪を素直に認めて、神様の前に心から悔い改めて、そして主の前をへりくだった非難されるところのない者として歩いていくことはできます。そうやって成長し続けていくことはできます。目標があるということは、そこにたどり着くこと、この地上では完璧にはできなくても、その目標を目指して歩いていくことができます。それが私たちが目指していくべき一つの成熟した者の特徴でした。

2. ひとりの妻の夫であること 2b節

次に、二つ目の特徴は、ひとりの妻の夫であることです。続きに「非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり」と書いてありました。「ひとりの妻の夫である」というのは、どういう意味でしょう。簡潔に言うのであれば、それは夫婦関係や性的な面に関して、いつも忠実で聖さを保っている人物のことです。

「ひとりの妻の夫である」という表現をそのままのことばどおり直訳すれば、「ひとりの女性の男性」と言うこともできました。つまり結婚している人であれば、自分に与えられているひとりの女性、妻だけを愛そうとします。自分自身に与えられている妻に対して、いつもどんな時も忠実であろうとするのです。もちろんこの忠実というのは、単純に別の女性と関係を持たずに、実際に性的な罪を犯さなければいいという話ではありません。ここで問われていることは、表面に見えている部分だけではなくて、私たちの内側、私たちの心の部分です。なぜかと言うと、表面上は何の問題もないように取り繕うことはできます。私たちがはたから見ていると、ひとりの妻に対して忠実な仲の良い夫婦に見える人たちも、問われるのは、だれも見えていないところで、自分ひとりでいるところで、感情や思いや心がほかの女性に目を向けて、奪われているのであれば、それはひとりの女性を愛している、ひとりの女性の男性ではないと言うわけです。ひとりの妻を愛する夫とは、願いや考え、そういったあらゆる面において聖さを保っている人物でした。犠牲的な愛を持って、自分の妻のために自分を捧げようとする人物でした。

なぜそんなふうに進むのか、なぜそんなふうに進むのかと言うと、その姿がみことばの中に描かれているからです。別のみことばがこう言っていました。エペソ5：25で夫たちに対してこう言われています。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」と。この点に関してマッカーサー先生もこんなことばを残していました。「ひとりの妻の夫とは、心と意思の全てにおいて、自分の妻に専心している人のことです。妻を愛し、妻を慕い、妻以外には心を向けません。考えにおいても行いにおいても、性的な純潔を保っているのです。」と。だとすると、特に結婚されている男性の皆さん、果たしてこのような聖さ、犠牲を伴う愛でもってご自分の妻を愛しているのでしょうか。問われるのは人目のあるところだけではありません。それが無いところでも、ひとりの妻の夫として妻を大事にして、みことばをもって導いて、その妻の必要を満たす者として成長しているのでしょうか。

でも覚えていてほしいのは、これは結婚している男性に限った話でもありません。結婚されている女性の皆さんも同じです。今、もしかしたら話を聞きながら思ったかもしれません。私の夫はこんな特徴を全然持っておりません。だからきょうは家に帰ったら長い話を、いや車の中で話をしないと。でももしそう思ったのであれば、それも自分のこととして少し考えてください。みことばは妻に対しても大切な責任を与えていました。先ほど私たちが読んだエペソ5章の直前を見ると、こんなふうに書いていました。エペソ5：22、24「：22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」、「：24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。」と。だとすれば、夫にも大きな責任があると同時に、妻にも大きな責任があります。主に従うように、自分のひとりの夫に従う者として成長しているのでしょうか。それとも表面上はうまく取り繕っていながらも、心の中でいろい

ろな不平不満や苦い思いを抱き続けているのでしょうか。結婚している男性も、結婚している女性も大きな責任を負っています。そして結婚していない独身の人も同じです。今、妻や夫を持っていない人であったとしても、ここで言われているひとりの妻の夫、これに問われるのと同じ心の態度を今持って歩んで行くことはできます。世の光として輝き続けるために、聖さにおいても、また忠実さにおいても日々成長していくことは今からできます。そのことがみなに問われるわけです。夫婦関係や性的な面においても、いつも忠実で聖さを保っていて、非難されるところがないもの、それがこのひとりの妻の夫であるという霊的に成熟した者の特徴でした。

3. 自分を制すること 2c 節

次に三つ目の特徴は、自分を制することです。続きに書かれていました。「ひとりの妻の夫であり、自分を制し」と。「自分を制する」とはどういうことでしょうか。それはいろいろな欲や願いに対して思慮深く自分をきちんと制御できる人のことを言いました。この点に関して、ジェリー・ブリッジスという先生もこんな説明を加えています。「(自分を制するとは) 自分の欲望や欲求、衝動、感情や情熱を管理したり、慎重に制御することです。それは私たちが『ノー』と言うべきときに『ノー』と言うことです。」と。自分を制することができる人というのは、『ノー』と言って断るべき時が来れば、はっきりと『ノー』と口にすることができる人物のことを言いました。言いかえると、自分の欲求に振り回される人ではないということです。自分の持つ感情の赴くままに、好き勝手に生きているような人のことではありません。欲望が自分のことを支配しているのではなく、自分が欲望のことをきちんと支配している者の姿になるのです。

そして当然この「自分を制する」ことというのは、教会のリーダーにとっては欠かせない特徴になります。霊的な教会のリーダーである者が、群れを導く責任を負っている以上、いろいろな人と、いろいろな問題と向き合わないといけません。もしそんな人物がすぐに自分の感情に支配されて、物事を慎重に判断できなかったらどうなってしまうでしょう。そのような立場にいる者が、人の必要よりも自分の必要を満たそうとして、自分の願いを果たすことに必死になっていたらどんなことになるでしょう。言うまでもなく、その教会にはさらに大きな問題が引き起こされることになります。群れの模範となるリーダーというのは、何かに振り回されるのではなく、きちんと自分を制することが、その慎み深さというものが問われるのです。でもこれもリーダーに限った話ではありません。みことばを見ていけば、みことばはすべての信仰者がこの特徴を追い求めていく必要があると教えていました。パウロもⅠテサロニケ5:6-8で「:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」と述べています。気づいたと思います。パウロはここで2回にわたって、私たちが昼の者として慎み深くいること、言いかえれば自分を制する者として歩んでいくことを求めています。自分を制しなさい、昼の者として歩んでいきなさいと。

でも新約だけではありません。旧約を見ても自制に関して同じように教えていました。たとえば箴言25:28にこうあります。「自分の心を制することができない人は、城壁のない、打ちこわされた町のようなのだ。」と。自分の心を制御できなかったら、いくらでも敵が攻め込んで来ることのできる城壁のない町のように、自制しないということは自分に大きな危険をもたらすのだと。

だとすると、果たして私たちはこのような者として少しずつでも日々成長し続けているのでしょうか。感謝なことに私たちがまわりを見渡してみれば、日々の生活を見れば、神様はたくさんの恵みや祝福を与えてくれています。たとえば私たちが楽しむことのできる娯楽もそうです。睡眠もそうです。朝、昼、晩のおいしい食事もそうです。神様は私たちに楽しむことができることを与えてくれています。でも、そのようなすばらしいものを求める自分の欲、それが自分の生活をコントロールしてはいないのでしょうか。

『ノー』と言うことが必要な時、果たして『ノー』と言うことができているのでしょうか。私たちの歩みは

自分の思いや自分の期待に振り回されて、思いどおりにならなければ、すぐに感情を爆発させるような不安定な歩みでしょうか。それとも感情や欲に支配されるのではなくて、主とそのことばに支配されている安定した歩みでしょうか。

聖書は私たちに、自制というものが大切だということを教えてくれました。ただここで一つ間違っただけのことがあります。それは、信仰者にとっての自制というのは、聖霊なる神様がうちに生み出してくださるものだということです。大切なのでもう一回言います。信仰者にとっての自制というのは、聖霊なる神様がうちに生み出してくれるものだということです。私たちが自制ということばを聞くと、すぐにこの世の自制とこんがらがることがあります。この世の自制というのは、自分の意志の力、意志の強さによって左右されます。私はもうこれをしません、そう決めて自分で頑張ろうとするのです。私たちの自制はそんなものではありません。私たちの自制というのは自分の努力や自分の意志の強さによるものではなく、神様に拠り頼むことにあるということです。

パウロはガラテヤ5：22-23でこう言っていました。パウロは御霊の実について語っていたのです。こんなふうにリストが挙げられています。「22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。」と。自制が御霊の実であることは、私たちにとってとてもうれしいことです。なぜなら、もし仮に自分の意志だけで、神様の求める自分を制する者として成長していかなければならなかったとしたら、そこには絶望しかありません。私たちの持っている意志の強さのうちに、罪や誘惑に勝利する力はないのです。でもそうではありませんでした。自分を制する者として成長していきたいと願っているのであれば、私たちはどんな時も神様に拠り頼んで生きていくことができます。神様が私たちにもう与えてくれている御霊の実、みことばを通して働かれていく御霊に満たされて歩んでいく時、成長していく御霊の実、私たちはそれを神様に頼って生み出していくことができます。御霊に満たされて私たちが歩んでいくのであれば、ほかのだれでもない主が私たちのうちに、その実を实らせてくださると言うのです。

たくさんの方が自制において難しさを覚えます。私もそうです。でも私たちには希望がありました。弱くかたくなな私たちにも主がともにいて、御霊の実を实らせてくれると。御霊とともに歩むことでいろいろな欲に対して勝利して、きちんと自分を制御できる人物、それが成熟した信仰者の姿でした。

4. 慎み深いこと 2 d 節

四つ目は慎み深いことです。続きに「自分を制し、慎み深く」とありました。「慎み深い」というのも二つのことばがくっついてできています。一つは「健全な」とか「正しい」ということば、そしてもう一つは「考え」ということばです。そしてここから「考えにおいて健全であること」とか「分別がある」といった意味で用いられたりしました。神学校の教授でもあったロバート・トーマス先生もこのことばをこんなふうに表現していました。「(慎み深いとは) 落ち着いた健全な心の中から生じる、正しい、規律のある理性的な思考。」と。つまり「慎み深い」ということを考える時のポイントは、慎み深い人物というのは物事を考えることにおいて、いつもみことばに立って賢明な判断を下せる人物だということです。まわりのものに流されていって、気の向くままに物事を判断するではありません。状況や人に左右されたり、感情に支配されるのではなく、落ち着いていて、その場、その場にふさわしい選択というものをみことばから下すことができるのです。先ほど見た「自分を制する」とことと、この「慎み深い」ということは、どこに違いがあるのだろうと思った人がいるかもしれません。確かに両方とも自分を制すること、自制という概念が含まれていました。よく似ています。でも違いを挙げるとしたら、自分を制することが自分の欲、願い、感情などを制することを強調するのに対して、慎み深いというのは自分の考え、思考を制することを強調するものでした。つまり慎み深い者として成長している者というのは、考えることにおいて、ますますみことばに沿った正しい判断を下せる者として成長していく者だということです。

もちろんこれも霊的リーダーにとっても欠かすことができません。でも同時に、すべての信仰者においても重要なものでした。

パウロは同じことばを用いて、別のところでもこんなふうに述べています。ローマ12:3に「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」と書いていました。考える者として成長していくということです。果たして考える者として少しずつでも日々成長しているのでしょうか。よく自分の歩みを振り返って考えてみてください。たとえば子育てや仕事、普段の生活の中においてはいろいろな知恵を求められる場面がたくさん出てきます。そのような場面にあつて、物事を判断したり、物事を決断しないといけないような時、みことばに基づいた知恵のある選択をしようとしているのでしょうか。置かれた状況の中で、いったい神様は何を喜ばれるのかということを考えて、みことばに立って歩もうとしているのでしょうか。それとも考えることは何もかも忘れて、状況が厳しくなれば冷静さを失って、自分の感情やその場の状況にすぐ流されてしまっているのでしょうか。

どんな時も私たちが正しい判断を下す者として歩んでいこうとするのであれば、自分たちの知恵や力ではできないということです。聖霊なる神様の助けを祈り求めながら、何よりも判断を下すためのみことばを心に蓄え続けている必要があります。詩篇119篇にはこんなことばが繰り返されています。たとえば119:98-100、103-104節を見ると、こんなふうに書いています。「:98 あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。:99 私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。:100 私は老人よりもわきまえがあります。それは、私があなたの戒めを守っているからです。」「:103 あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。:104 私には、あなたの戒めがあるので、わきまえがあります。それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。」と。生まれつきの私たちには知恵などありません。みこころが何なのかわからなくなって、私たちは日々の生活の中で混乱してしまうことがよくあります。でも聖書は、みことばは、私たちを賢くすると約束していました。詩篇の著者は、私は私の敵よりも賢いです、それは私が経験を積んだからですと言いませんでした。私は私の師よりも、私の老人よりも賢いです、それは私がいろいろなことを調べて学んだからです、そんなことは言いませんでした。ここで言われていたことは、あなたのみことばが、あなたの仰せが、あなたのさとしが、私のうちにあるから、そのみことばによって私は賢くなりますということでした。罪や誘惑から自分の身を守るために必要なものは、みことばです。子育てにおいて、仕事において、将来のことを考える時に必要になるのはみことばなのです。私たちが自分の身を罪や誘惑から守って、喜ばれる者として歩んでいこうとするのであれば、みことばを学んで、学んだみことばの真理を愛して、そしてそれに基づいて生き続けていくことが必要になるのです。自分の考えや思いを優先するのではなく、すべての面で勝っている、この世界を造った創造主の知恵が書かれているこのみことばに自分のすべてをゆだねて生きていくことです。そして、そんな生き方こそが私たちにとって本当の平安を、安心を、知恵を見出すことができるものでした。

果たしてそんな者として、神様のことばに根差して考える者として、少しずつでも成長しているのでしょうか。どんな時もみことばをもって考えて、みことばから賢明な判断を下すことができる人物、それが成熟した信仰者の姿でした。

5. 品位があること 2 ● 節

五つ目の特徴は品位があることです。続きに「**慎み深く、品位があり**」と書いていました。おもしろいのは、この「品位がある」ということばのもととのギリシャ語には、今のコスメの語源となる“コスメオス”ということばが使われていました。女性の皆さんが普段、コスメ——化粧品を使っている理由は何でしょう。それは身だしなみを整えるためですね。最近になって、私もやっとその大変さというものがわ

かってきました。朝起きると顔を洗って、化粧水をつけて、土台となるファンデーションをし、フェイスパウダーをし、コンシーラー、アイライナー……と、見ていると大きなポーチの中からありとあらゆるものが出てくるのです。今までの人生で見たこともないものばかりでした。でもそのようなコスメを使って女性は美しく身を整えようとするのです。パウロはそんなことばをここで用いました。霊的に成熟している者というのは“コスメオス”——品位あるものです。言いかえれば、その人物の歩みがみことばによってきちんと整えられた、まわりからの尊敬を集めるような美しいものであることを求めているということです。その歩みを目にした者たちがすごい、美しいと称賛するような、みことばに立った規律正しい歩み、それが成長した信仰者の姿、品位ある者の姿だと言うのです。

ただここで勘違いしてほしくないのは、みことばは、単に私たちの外側だけを上手にふるまっていればいい、称賛されればいいという話をしているのではありません。化粧品というのは外側しか整えられません。でも聖書は、そんな人前だけ仮面をかぶってふるまう偽善的なものを良しとはしませんでした。イエス様もはっきりとそんな態度を非難しました。マタイ23：27－28に「**27 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。28 そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。**」とありました。ここで言われているのは、外側だけうまくきれいに取り繕っていれば大丈夫ということではなく、外側も内側もどちらにおいてもまわりの者から尊敬されるような評判の良い、きちんと整ったものであることが求められているということです。

果たしてこのような者として、少しずつでも今成長しているでしょうか。私たちのまわりの人たちが私たちの歩みを見る時、その歩みに対して尊敬を抱くでしょうか。それともこの人と同じようには歩みたくありませんと敬遠する者でしょうか。私たちが持っている愛、私たちが持っている赦し、私たちが持っている忍耐、私たちが持っている信頼、そういったものは主の模範によって徐々に徐々に整えられたものになっていっているでしょうか。人々の尊敬を集めるようなものでしょうか。もちろん私たちがそうやって尊敬される生き方をしていくというのは、自分が尊敬を受けるためではありません。私たちが誇りとしているのはただ主だけです。でもだからこそです。誇りとしているその愛する主を人々が軽んじたり、けなすような歩み、私たちはそれから離れていけないと言わなければならないのです。

別の箇所でもペテロも次のように述べていました。I ペテロ2：12に「**異邦人の中にあって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。**」と書いています。私たちのなすすべてのことが神様を知らない者にとって神様をほめたたえることにつながる、そんな生き方を私たちは目指していくことが問われているのです。それはことばにおいてもそうです。ふるまいにおいてもそうです。夫婦の関係、親子の関係、友人関係においても同じです。私たちの時間の使い方、私たちのお金の使い方、そういったものにおいてもそうです。あらゆる面において人々の尊敬を集めて、私たちに働かれるその神様の栄光を、神様のすばらしさを人々があがめるような、そんなみことばによって整えられた品位ある者、それが成熟した信仰者の姿でした。

6. よくもてなすこと 2 f 節

次に、六つ目の特徴は、よくもてなすことです。続きに「**品位があり、よくもてなし**」と書いていました。「もてなす」と聞くと、私たちから遠く離れたものではありません。日本人であったら、「もてなす」ということをよくやります。でも、ここで言われている「よくもてなす」というのは、何を意味しているのでしょうか、このことばも今までと同じです。二つのものが一つにくっついてできたものでした。「愛情」と「愛」を意味することばと「見知らぬ人」を意味することばがくっついてできたのが「よくもてなす」というものでした。そこからこのことばは、自分と関わりがない人、見知らぬ人に対して示す愛情を表したのです。見知らぬ人に対して示す愛情。それがこの「よくもてなす」ということでした。こう聞くと、

「もてなす」というのは、自分の知らない人、自分と関わりのない人に対して愛を示していれば問題ないのですねと思うかもしれませんが、しかし、そうではありません。覚えていてほしいのは、このことばは私たちが示すべき愛の範囲を強調しているということです。言いかえると、私たちはすべての人に対して愛を示すべきです。そしてその範囲というのは、自分にとって親しい者だけではありません。関わりのない人、見知らぬ人にも私たちの愛は及ぶということをここで教えていました。

でも、それは私たち、よくわかります。私たちは身近な人に対しては、だれに言われなくても進んで愛を示そうとします。自分の家族——夫や妻、自分の両親や自分の子どもといった身近にいる人に対しては、たとえ多くの犠牲を払うことになったとしても、別にそれを犠牲とも思いません。喜んでそれをして仕えようとしています。親しい友人も同じかもしれません。仲良くしている友だちが困っていれば、時間や労力も気にせずに、助けを与えようとするでしょう。関係が近ければ近いほど、親しければ親しいほど、自ら進んで優しさや愛情を示そうとするのです。でもその逆になると、どうでしょう。自分と関わりがない人、あんまり親しくない人、いやむしろ自分が苦手に思っている人に対してはどうふるまうでしょう。正直になると、身近な人と同じ愛を示すことに難しさを感じます。関係が遠ければ遠いほど、私たち自ら進んで手を差し伸べることをためらうかもしれません。残念ながら、私たちの愛というのはその相手との関係性によって変化することがあるのです。だからこそパウロはここで、「よくもてなす」ということを成熟した信仰者の姿として挙げました。成長していく者というのは、例外なくすべての人に対して、たとえばそれが見知らぬ人であったとしても変わらぬ愛でもって愛そうとする者だということです。自分の家族に対して示すのと同じ態度でもって、仲の良い友人の必要を犠牲をもってでも満たそうとするように、私たちは関わりのない人に対して、たとえば自分の敵でさえ自ら手を差し伸べ、喜んで仕えようとするということです。

イエス様もルカ6章でこう言われています。ルカ6：32－33、35に「:32 自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。:33 自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。」、「:35 ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。」と書いていました。はっきりと書いていました。自分のことを愛してくれる人を愛することは、この世の人でもできます。アガペの愛がなかったとしても、それはできると言われているのです。でも全く親しくない人、ましてや自分のことを傷つけるような敵を、一時的ではなく、どんな時でも愛そうとするのであれば、それは神様の愛を知らなければ不可能です。恩知らずの罪人、あわれみに決して値しなかった私たちを救ってくださった神様の深いあわれみを、その深い愛を知った者は、同じ愛でもってすべての人を愛していくことができるのです。そのような愛が与えられている私たちには、親しい人だけではありません。見知らぬ人に対しても、変わらず愛情を持ってもてなしていくことができます。そのような者として成熟した者こそ、ここで描かれていた「よくもてなす」という信仰者の姿でした。

7. 教えることができること 2 g 節

そして最後にもう一つだけ、七つ目に見られる特徴は「教えることができる」ということです。続きに「よくもてなし、教える能力があり」と書いていました。当然教会の霊的リーダーにとって、みことばの知識をただ知っているだけではなくて、その真理をわかりやすく伝えることができる能力を持っていることは重要なことでした。羊を養って、羊を導いていく立場を担っている者にとって、霊の食べ物であるみことばをもって人々を励まして、過ちに陥っている者を正してあげることは欠かせないことでした。でもこの点においても、リーダーだけではありません。もちろん公の場で教えることはないでしょう。それでもみことばは、すべての信仰者がこの特徴を追い求めていく必要があると教えていました。たとえば

パウロもこんなふうに述べています。コロサイ 3 : 16に「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」と書いていました。みことばは私たちが互いにキリストのことば、みことばをもって教え合ったり、戒め合っていくことを求めています。複雑なことではありません。それぞれが日々の生活の中で学んだみことばの真理を、それぞれが学んだ神様のすばらしさというものをほかの人と分かち合って、ともに感謝することを求めています。

だとすれば、そのような者として私たちは少しずつでも成長しているのでしょうか。互いの間で、私たちは愛をもって真理を語るものなのでしょうか。教える舞台というのは講壇ではなく家の中かもしれません。親として、子どもに対して聖書を教えることができます。祖父や祖母として孫に対して神様のすばらしさを教えてあげることもできます。舞台は人前ではなくて、だれかとの個人的な会話の中かもしれません。みことばをもって私たちは人々を力づけてあげたり、間違っていることがあれば、優しく正してあげることもできます。私たちはみな教えることが求められています。だとすれば、その与えられた自分の責任を果たす者として、少しでも成長しているのでしょうか。みことばを熱心に学んで、それを心に蓄え、その真理を愛をもって語っていく者、それが成熟した信仰者の姿でした。

さあ皆さん、半分見ました。来週また半分見たいと思います。でもここまで学んできてどうでしょう。正直になれば、苦しかったかもしれません。みことばを見ていく中で、自分の歩みが余りにも神様の描いているその姿からかけ離れていることに気づかされたでしょう。自分自身のあまりの罪深さに打ちのめされたかもしれません。私も改めて 1 週間このことを考える時に、心が非常に責められました。でもそうだとすれば、最後に一つ覚えておいてください。目標ははっきりと示されています。では、その目標を目指していく上で、いったい何が私たちの足を前に進め続けるのでしょうか。いったい何がこのような暗やみで、自分の罪深さで苦しむ中であって、もっと成長したいと、私たちの心を動機づけるのでしょうか。それはいつも不完全で、罪深い私たちに示してくださった神様の愛です。私たちはこの特徴を見る時に、神様が求めている姿とはかけ離れていることを目の当たりにします。神様が私たちを救ってくださった時、神様は私たちがどれほど罪深い存在なのかを知らずに救いを与えてくださったのではありません。神様は私たちがどれほど汚くて、罪に汚れていて、愚かなことを知っていてなお、それでもご自身の御子、キリストを与え、恵みによって救ってくださいました。きょう見た私たちのだれも満たすことのないこの特徴をすべて満たしていたお方、完全なイエス様が不完全な私たちのために、十字架にかかって死んでくださいました。その愛を覚え続けることです。私たちが今こうやって成長を目指して走っているのは、何とかして自分を整えて神様の前に受け入れられるためではありません。私たちはキリストにあってもうすでに完全に受け入れられたからこそ、完全に赦されたからこそ、その喜びの応答として成熟を目指して走っています。すべての罪を赦されて、愛する神様の子どもとされた者として、私たちが愛している神様が求めている姿に、喜ばれるその姿に変わっていきたい、そうやって歩んでいます。

だからこそもしこの中に、まだこの神様を知らない方がいるのであれば、きょう見てきたこの特徴を自分の力で頑張ろうとすることはやめてください。それは不可能です。その前に、自分自身のこととしてイエス・キリストを救い主、主として信じ受け入れてください。何よりもこの方の愛を自分のこととしてきょう知って帰ってください。そしてその愛を知った者は、続けて歩いていくことです。自分の罪と向き合うことは、時に大きな痛みを伴います。目をそらしてしまいそうになる時もあります。でも皆さん、キリストに似た聖い者へと変わっていくところにこそ、私たちの喜びは増し加わっていきます。私たちはそうやって歩むことで、神様をますます知っていくのです。だからこそみことばが定めている、みことばが教えてくれている目標を目指して、それに目を留めて、いつもキリストを見上げて、そして神様の助けを頼り頼みながら成熟を目指してともに歩いていきましょう。